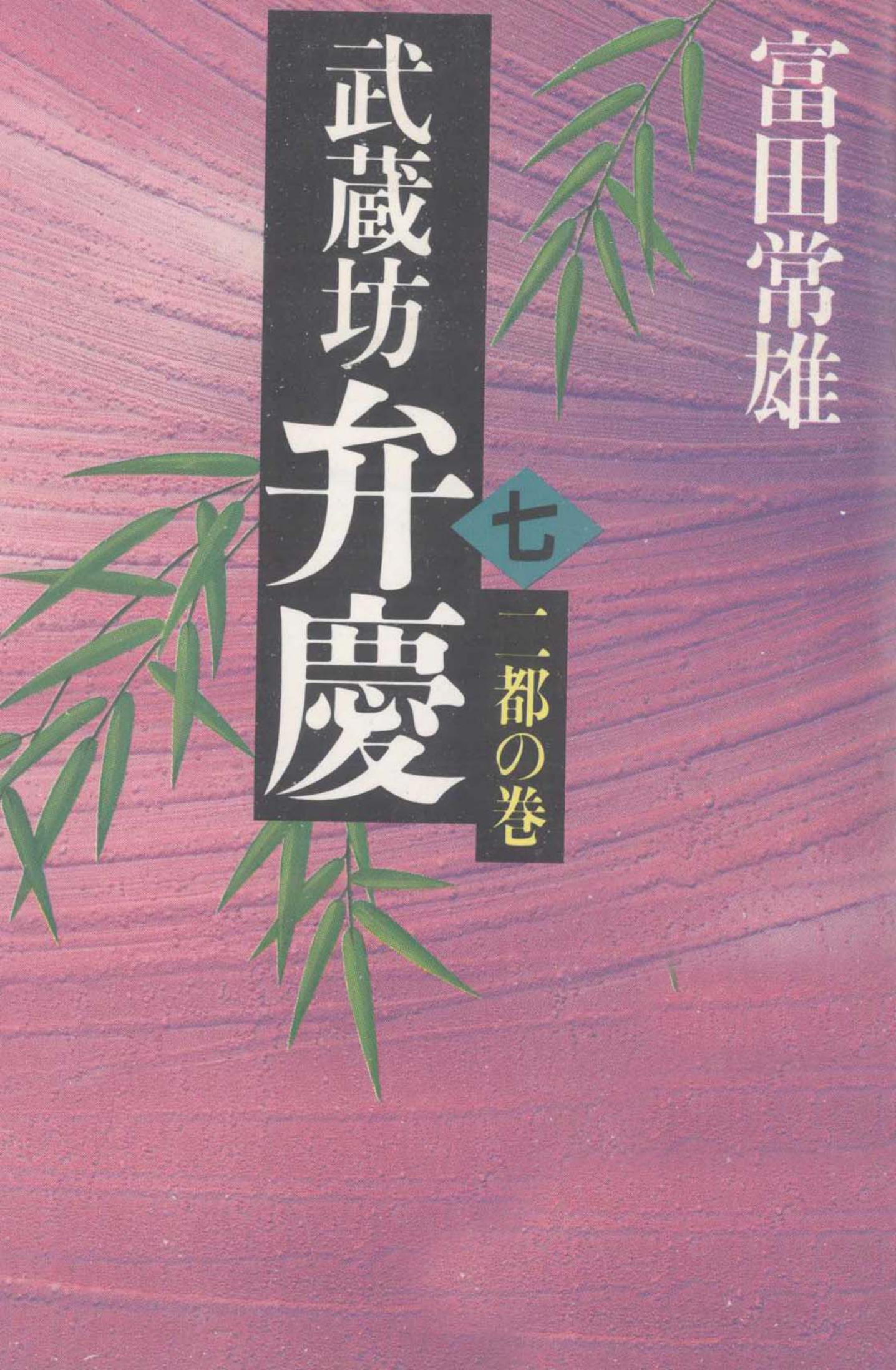


富田常雄

武蔵坊弁慶

七

二都の巻



む さしほう べん けい
武蔵坊弁慶(六) 扇の巻

とみ た つね お
富田常雄

© Motoko Tomita 1986



講談社文庫
定価460円

昭和61年6月15日第1刷発行

発行者——野間惟道

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——共同印刷株式会社

印刷——共同印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。(庫一)

ISBN4-06-183798-2 (0)

江苏工业学院图书馆

藏书章

武蔵坊弁慶 (七)

目次

小八葉の車	七
あひる	四二
義経と景時	六四
屋島の灯	八四
玉虫の扇	一〇七
旗雲	一二三
潮	一五六
壇の浦	一七九
明石の女院	二〇〇
人心表裏	二四三
腰越	二七四

武蔵坊弁慶(六) 扇の巻

小八葉の車

堀河の館やかたの高い櫓けやきで蜩ひぐらしが啼ないていたが、樹から樹へ飛ぶのかその声が次第に遠のいていった。

下河辺しもかわべ庄司行平しょうじゆきひらが河越太郎の郎党を三十人連れ、鎌倉においた義経の妻、若わかを伴って上洛するといので、また、弁慶は北の方のために新しく対屋たいのやを建てるのに大童おおわらわになっていた。木匠こだくみの采配さいはいを揮うのは有難くはないが、合戦の無情よりましである。

対屋は殆ど出来あがり、夕陽が屋根に映はえているのを彼は腕組みをして眺めた。

「武蔵坊、お身の手にかかるとあつと思う間に屋形やかたが建つう」
伊勢三郎が彼と並んで腕を組んだ。

「ふふん」

と、弁慶は生返事なまへんじをして顎あごを撫なぜた。

「案ずるに、武蔵坊の先祖は木匠と見たが」

「やかましい」

「しかしのう、堀河の館は賑々しくなつたわ、鎌倉より北の方は上洛せられるし、わが君は從五位下に叙せられ、叙留して大夫判官となられし上、この度びは昇殿を許さるるとな」

「うむ」

弁慶はいい返事をしなかった。

義経は一院からの思召しで辞退することも出来ず、止むなく叙位をお受けしたという旨を、弁慶のすすめで鎌倉へ飛脚を立てて書き送ったが、案の定、頼朝からは、それについてなんの返事もなく冷たい沈黙が守られていた。恐らく、その書面の届く前に頼朝は若を上洛するよう命じたのであろう。

もし、弟に妻を届けてやる寛大さがあつたら、この叙位を喜んでくれたに違ひなかつたが、鎌倉からのどの噂も義経の叙位を佐殿がひどく不快に思っていることを伝えた。義経が一院に強請したかにも思われているらしかつた。

弁慶の心配がそのまま実現したのである。

一院の御所は、検非違使左衛門少尉の役はそのまま九月三日に義経を從五位下に叙した。

これに依つて義経は栄誉ある大夫判官となつたわけである。大夫は五位の位階を持つものの称であり、判官は六位の官だから五位になれば判官を罷免されるのが常であるが、特に功勞のある者は判官のまま五位になった。これを叙留といい、大夫判官といえは都の司法警察権を己れの一手に納める実力ある役目であつた。

その上、義経は昇殿を許されることになつてゐた。

「これにて、わが君も上洛以来の苦勞が酬むくわれたというものだの、武蔵坊」

「うむ」

「お身は嬉しくないか」

「酬むくわれすぎて嬉しくないわえ」

「はて」

「さればよ、好事魔多しと申す。あまりに一院の御所の御寵愛ごちようあいが深きに過ぎて、鎌倉のあたりの雲が暗くなるわえ」

「佐殿への思惑か。はっはっ、朝廷みかどの思召しだ。大頭殿おおあたまもうらやむばかりで手は出まいが」
「手は出ぬというか。鎌倉の力をそう軽くみては危あやうかろう」

彼は若い主あるじが大夫判官となり、さらには昇殿を許されることに多くの不安を持っていた。ようやくに都の風に慣なれた義経の起居振舞いまでが都風にみやびやかになり、言葉遣いまでが優にやさしくなった上、彼は殿上人てんじょうびとの知遇を受け、その暮らし向きを見様見真似で自分の生活にまで採り入れるようになった。それは、外見ばかりでなく彼の心をも浮華ふかではあるが、みやびやかなものにしてきている傾かたむきがあった。

義経の危機と感じたのは彼ひとりであつたかも知れないが、弁慶の心は暗かった。その上、今度のことが頼朝の不興に一層の拍車はくしゃをかけることは眼にみえていた。

後白河法皇ごしらかわは鎌倉の頼朝の對抗的な武将として義経の官職を進めている観があつて、それも

弁慶の嘆きの一つであった。

弁慶の下で木匠の采配を揮っていた直垂姿の那須十郎為隆が、十七、八歳ぐらいの彼に瓜二つといたい青年を伴って近づいてきた。十郎為隆は一の谷の逆落しに馬が前肢を折ったため左手の肘を砂に突いて、ひどく痛めていた。

「武蔵坊、弟、与一宗隆、ただ今、上洛致してござる」
「おお、お許に瓜二つだな」

青年をかえりみて弁慶はにっこりした。

「与一宗隆にござりまする」

と、青年は弁慶を見上げてから恭しく会釈した。

「何歳に相成る」

「十七歳にござりまする」

「若い、兄に似て弓をよく致すか」

「はい、いささか」

「頼もしいの」

「このたび、北の方の御上洛に従い、大叔父、下河辺庄司行平が参るに先立ち着到しました」
「武蔵坊」

と、兄の為隆が代わった。

「河越も小山も佐殿の挙兵に加わり幸運でござったが、那須一族はまことに不運、佐殿が兵を

挙げられし時は嫡男光隆以下九人の兄は平家と共に西国に赴き、鎌倉に馳せ参ぜしはわれ等二人でござる。されば、弟と共に弓矢の誉れをあげたき心組みでござる」

「うむ、して、為隆、肱の傷はいかがだ」

「なかなか」

二十歳の為隆は力なく首を振った。

「灸は利かぬか」

「怠りませねど、はかばかしくは」

「ふむ、それは困るの」

「弟、与一は某に劣らず弓をよく致しまするゆえ、いささかはお役に立つやと心得まする」

「旅疲れもあろう。ゆるゆると休ませて後、わが君の御前に伴うがよい」

「はっ」

弟の与一を伴って十郎為隆は館の庭へ入って行った。

蝸が遠くで啼き、ようやく陽が落ちようとしていた。

「どうだ、三郎、今日は心が浮かぬ。酒を酌もう」

弁慶は伊勢三郎に顎をしゃくってみせ、にやりと笑った。

誰れであろうか、花折りの延年の舞を謡う声が微かにきこえてきた。

王母が昔の花の友

桃花の酒をやすすらん……

弁慶の声にしては洪きに過ぎるし、常陸坊かな、いや、別の者かも知れぬと考えながら義経は耳を傾けた。遠い昔になった奥州平泉の思い出が戻ってきた。あの頃は彼の笛につれて弁慶や海尊がよく延年の舞をやり、その席には雑仕女の妙が控えていた……。

そうまん是を伝えて

今が我に至るまで

栄花の袖をひるがえす

任官した自分を祝ってくれてでもいるような歌が繰りかえされるのが、義経の耳には快かつたが、それにしても、この頃は六条堀河のこの館にも、とみに活気が溢れてきた。やはり自分が大夫判官になり、昇殿までも許されることになったのが、家人の間に活気を呼んだのであろう。そう考えると彼は胸が慄えるような幸福感の虜になった。

灯を片頬に受けて静が彼の脇に控えていた。それを眼にすると、また、満ち足りた思いが潮に似て寄せてきた。もはや、これで自分は何にも言うことはない。亡父の仇たる平家が未だ生存こそしてあれ、それすらも、心から遠のいていた。

今、義経の心にかかっていることは鎌倉に置いた妻の若^{わか}が上洛するのを、この静がどう迎えるかということであつた。彼には雑仕女の妙の入水^{じゆすい}という痛い思い出が伴^{ともな}っていた。

「静」

義経はためらうように声をかけた。

「はい」

と、答え笑顔を作つて静は殊更^{ことさら}に言葉を改めた。

「何事でござりまする。判官殿」

言つてみたくならぬ呼び方だつた。

義経が叙位任官に歓喜した時と同じように、彼女は彼を無位無官の御曹司ではなく、判官と呼ぶことに無限の喜びを感じていた。後朝^{きんぎょ}の別れにのぞんでは、ただ殿、と呼んだ。二人だけの世界ではそう呼ぶことが楽しく嬉しかったが、しかし、二人だけしかない時でも、誰れかが不意に現われるかも知れぬ席では他人行儀^{ぎようぎ}であっても、判官殿と呼ぶのが見栄^{みえ}でもあれば誇りでもあつた。慣れていない故^{せい}もあろうが、そう呼ばれた時、顔を赤らめるのは静ではなく、むしろ、義経の方であつた。

「今宵は誰ぞ酒を酌んでいるとみえるな」

義経は若のことを言いそびれた。

「花折りを謡^{うた}われておりまする」

「うむ、武蔵坊であらうか。静はあの男をどう思つてか」

「殿のおん身を思ふ一徹なの方、その上に面白氣なお人でござりまする」

「恐ろしげにみえてものう、あの男、女性のことをちろりと申す」

「ちろりん……」

「おお、ちろりとな。そのわけは、触ればちろりと鳴り、ちろちろと泣く魔性の器とか。はっはっ、所詮、男はこのちろりんには打ち勝ち難いと申していた。はははは」

「ほほほほ」

判ったとみえて静もつられて笑った。

義経の氣持は和やかであつた。誰れをも許し、また、誰れもが自分を愛してくれているような氣がした。若のことを言いそびれて他愛もない会話を交わしながらも、彼は大夫判官という地位に安堵感を覚えて口辺から微笑を消さなかつた。

心が奢つていたともいえるが、また、無理のないことでもあつた。

かつての平家の人々の榮譽と較べたら、この地位は低いかも知れない。いや、源氏でさえ宇治の平等院の合戦で討死した頼政入道は從三位に昇つていたといえるが、これは源平両氏が始まつて以来の破格の沙汰であつた。源三位頼政の次男兼綱は今の義経と同じ地位であつたが、これは武士のたどりつく最高の極官というべきで、それなればこそ兼綱を源大夫判官と称んで羨望の的になつていた程であつた。

「静、この九郎は鎌倉の佐殿とは兄弟とはいへ、ありようは一介の家人なのだ」

義経はぎごちなく言った。若の^{わか}ことを巧みに告げたいと思うと一層に廻りくどくなった。

「八幡宮の上棟式に殿の味われまいたお悲しみも存じあげておりまする」

「うむ、されば」

義経は話の緒口^{いとぐち}をつけることに骨を折った。

河越太郎重頼の娘である若は頼朝によって定められた妻である。源家の家人中でも武蔵国の豪族として聞え、また、重頼の妻は頼朝の嫡男の乳付^{ちつけ}（生まれた子に最初の乳を含ませる女）を勤めたほどの名誉ある有力者でもあった。そして、義経は二年前の秋に、この若との結婚のために奥州から遙々^{はるばる}鎌倉の十二社の義経の館を訪れ、前後八年の間、身の廻りの世話をした雑仕女の妙^{たえ}を死なせたのである。鎌倉の飯島崎の、初秋の淡い午下^{ひるさき}がりの陽の下で岩の上に残された妙の遺品を認めて彼女の入水^{じゅすい}を知った時の暗い思いが、ふたたび義経を襲った。

この静に妙の轍^{てう}をふませたくないし、また、自分のもとを去らせたくない。それは彼にとつて必死の感情である。

「されば、坂東の家人^{けにん}は坂東の武士の娘をめとらねばならぬのが慣^{なら}わしだ」

「心得^{こころえ}おりまする」

「武蔵坊が木匠共を励まして館の庭に家作りさせているを知ってであろうが、坂東より河越重頼の娘が上洛いたす」

「北の方でござりまするな」

静の声は落ちついていた。